

伊島薫

自然体でリベラルな素顔のクリエイター。



取材・文／端井由紀子
カメラマン／武薙育子
協力／(株)バイブライン
大阪東急ホテル



あの桐島かれんに破けたパンストをかぶせ、こともあろうにそれをひっばる。目は吊り上がり口元は歪み、さすがに変貌をきたしたビジュアルがショッキングだった写真集「新美人論」。人が発するエネルギーからイメージした色を、全身に塗ったモデル達のフォト・シリーズ「COLORED Beauty」。その密度を自在に操る質感、独特の濃度を持った色彩感覚、オーソドックスから突出したさまざまなアイデアで構築された写真家・伊島薫の仕事は、いつも見るものに心地よいビジュアル・ショックを与えてきた。その名前をちらほら聞き始めた、80年代半ば。独特の色彩で強烈なイメージを打ち出したあの頃からほぼ10年。「美の探究者」「色彩の魔術師」「外部の思考者」など彼を形容する言葉は多いが、先頃その領域をまた広げ「ジャック」なるセンチシヨナルな雑誌を発刊。フォトグラフィアにしてチーフ・エディター、京都生まれにして東京在

住の素顔の彼にインタビューした。

いっぱしのカメラマンになるのに、ずいぶん時間かかってますからね、こう見えても(笑)。

会ってみたら想像していたのとは違っていた、というのはよくある話だが、伊島薫氏の場合もまったくそうで、いかにもファッション・フォトグラフィア的な「バリバリの人」もしくは多くを語らない無機質な人を想像していたこちらにすれば、拍子抜けするくらいに自然体の人、というのが実際の印象である。「シャワーを浴びていて」と少し遅れてきた伊島氏は、さっぱりとした表情で取材が行なわれたホテルのロビーに現われた。

知られている事実ではあるが伊島氏は京都生まれである。だがフォトグラフィア・伊島薫の育ちはトーキョーといっても差し支えないであろう。そのトーキョーから発信され目に触れてくるもの、伝わってくる情報はいわゆるお洒落なものばかりである。「流行通信」などのファッション雑誌の誌面を飾るファッション写真、今をときめくモデルやタレント達との仕事の数々。伊島氏は、京都の高校を卒業してすぐに東京の写真学校に入ったと言うが、それははじめからはっきりと写真家をめざしてのことだったのだろうか。

「小さい頃から写真撮るのは好きだったけど、それはもう今の時代生まれた時からカメラって身近なものだから特別なことじゃないし。うーんカメラ以外にも趣味はたくさんあったんだけど、たまたま続いたのがカメラだったということかな。でも高校を出る頃には、写真家になることをもうはっきり意識していましたね。」

「でも本当に写真でやっていこうと思ったのは、専門学校(三年制)を2年で中退してから(笑)。やっぱり学校やめたからには、ちゃんとしよう(笑)って気になって。それでまず写真学校の関係で知り合いになった写真家の小林昭さんのアシスタントになったんです。」

その後渡米。アメリカで一年くらい「ブラブラ」した帰国後、23才でフリー宣言したが当時仕事はほとんどなく、そんな状態が五年くらい続いたという。現在の伊島氏の活躍ぶりからは明らかに信じがたい話である。伊島薫というとメジャー路線で順調にやってきた人、というイメージがあるが?

「名前の出た時はうまくいった時だから、最初からうまくいっているように人には見えるんだろうけれど、いっぱしのカメラマンになるのに、ずいぶん時間かかってますからね、こう見えても(笑)。」

に苦勞人ぼさはまったく感じられない。その五年がただ仕事がないだけの五年でなかったことは容易にお察しいただけるだろう。SALEやTRAを始めたのもその頃のことだろうか。

「ええ、もちろんそうです。」

ある人がすればお笑いになってしまっても、僕がやるのはファッションになつたりする。

SALEやTRAとは伊島氏自身が作り出した自分のメディアである。SALEは1ページ大の広告ばかりのタブロイド版のフリーペーパーで、TRAはそのノウハウを使って出来たウイジュアルにサウンドを加味した日本初のカセットマガジンである。TRAはゴンチチやショコラータを輩出し、SALEは代わりわりしてSALE2として現在に至っている。伊島氏はそこで写真ばかりか、編集もこなしていた。現在のジャップ創刊へのベースもすでにここに生まれている。

帰国後ペーター佐藤さんのところで「プラスチック」を作ったばかりの頃の佐藤チカや立花ハジメらと知り合い、彼らのツアーに同行して写真を撮り音楽雑誌の仕事をもったり、ディレクター・秋山道男氏のとこで仕事をもちたりしていたが、まだほとんど便利屋扱いだった頃。「実際、その頃は

伊島薫

伊島薫プロフィール

- 1954年京都で生まれる
- 1980年横山忠正と共にSALE創刊
- 1982年式田純、板谷充裕と共にカセットマガジンTRA創刊
- 1992年写真集COLOR PHOTO GRAPHS, BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS 光琳社出版
- 1993年写真集・新美人論1・PIPE LINE BOOKS 写真集TAMAO光琳社出版
- 1994年ファッション誌ジャップ創刊・光琳社出版(編集長)
- 写真集HAIRMODE美術出版社



The SPECIAL Real INTERVIEW Face

何かを思いついても、普通なら、そうだね、おもしろそうだねで終わるけれど、僕はそのアイデアをそのまま実行していきます。





「でもファッションに関しては、もともと苦手意識がある方だったんです。ほら原宿とか歩いてても気恥ずかしさを感じるような。ファッションに対するコンプレックスがありましたね。もちろん撮られたらいいとは思ってましたけど、写真を撮っていく上でファッション写真を特に意識していた、というようになことはなかったですね。」

意外な話である。ところで、あの斬新なディレクションは、いったいどうやって思いつくのだろうか。伊島氏が触発を受けるものとは？

「日常の会話かもしれないし、映画や何かのチラシかもしれない。世の中のすべてのもの、と言っているんじゃないかな。目につくものすべてからヒントもらっている。それからたとえば社会的地位のある有名人が言っているからといってありがたがって聞いて、友達が言っているからといって適当に聞き流すってことはしないですね。それにそこから何かを思いついても、普通なら、さうだね、おもしろそうだねで終わるけれど、僕はそのアイデアをそのまま実行してしまっ。」

面白いことに、と紅茶のおかわりをしながら伊島氏は続ける。「ある人がすればお笑いになってしまっ。このでも、僕がすることファッションになつたりする。」

なるほど確かに一つのアイデアが実現される形は、その方向によって違ってくる。伊島氏の美意識で、そのアイデアに肉づけされることで、それはフ

アッション写真として息をするのである。ファッション写真とほ、人をいかにカッコよく美しく見せるか、というものは

ファッション写真、という言葉が何度か出てきたが、その意味はと聞かれてすぐに答えられる人が何人いるだろうか。伊島氏はそれに対する、驚くほど明確な解答を持つ写真家の一人である。

「ただ洋服を紹介していくのがファッション写真と思われがちだけれど、ファッション写真は、人をいかにカッコよく美しく見せるか、というものは

「ただ洋服を紹介していくのがファッション写真と思われがちだけれど、ファッション写真は、人をいかにカッコよく美しく見せるか、というものは

そんな彼が、海外のファッション雑誌の受け売りで、服飾情報主義におちいった現状のファッション雑誌にさっさと見切りをつけ、自らを編集長に新たに発行したファッション雑誌がジャップである。

創刊のきっかけは、やはり既成のメディアでは自分のやりたいことをさせてくれなかったから？

「もちろんそうですね。やりたいアイデアがあったとしても『面白いけど、うちの本ではちょっとね。』っていうのが多かったりして。それではやりたいことをする満足感もない上、オーダーにそった不本意な写真まで撮らないといけない。これじゃ表現者としては二重にマイナスなだけでしょう。それに既成の雑誌で何か新しいことをやろうとすると、どうしても企画モノ、単に本流を離れた亜流の一つとして扱われてしまっ。面白い、とは言ってくれても

アートでもファッション写真でもコマースナル・フォトでもない、つまり異端のモノとして、所属がはっきりしないからときちんとした評価がされにくいんです。」

そういうえば伊島氏は以前何かのインタビューで、「僕はある意味では成功者かもしれないけれど、別な意味ではまったく正確な評価を受けていないと感じるんです。」と答えていた。その気持ちはいまだ変わらないのだろうか。

「つまりこうやって取材を受けたりとか、確かに誰からも相手にされていないというわけではないけれど、僕自身ははつきりとはどこにも属さないから、その専門分野がないわけで。だから批評対象外のものとして見られてしまっ。僕としては、アートやファッションにこだわらるあまり仕事に限定されることからは、自由になりたいけれど、そうすることどこからも無視されてしまっ、というかちゃんと受けとめてくれない、という思いは依然ありますね。だからこそ業界の人間にも是非ジャップを読んでもらいたいと思っています。」

その業界での評判はどうなのだろうか。「若い人には意外なくらい受け入れられる上となると、静観している、とかどうという雑誌はまだ様子を見ているという感じですね。」

だが伊島氏の言葉のどこにも焦りや気負いは感じられない。落ち着きともクールさとも違った自然体の振る舞いは、自力で旗を振れるくらい強くてリベラルな氏の内面を映しているようにも見える。

また一枚のファッション

リベラルでありたい。誰もが思うことだが、その理想の実現には思うより強さが要求される。気付けば長いものは巻かれるで、自分を貫き通せる人はほんの一握りだ。さらに自分が本当にめざすものだけを追えるクリエイターとなると、その数はより限られたものになる。その中でも伊島氏はこの時代に呼応して現われた新たな波動の一つと言えるであろう。自分の中の流れに従い、自力で旗を振る。だからこそその自然体、その気負いのなさこそが、彼のクリエイターとしての証、であるのかもしれない。

「単に新製品やニュースタイルの情報ではなく、エディター、フォトグラファー、スタイリスト、ヘア・メイク、モデルなど、そこに携わった人達全員が今一体何に興味を持ち何に共感し何を夢見ているのかという総意の結晶」と定義づけるジャップには、刺激的な企画、ビジュアルはもちろん、ディテールにも伊島氏自身のアイデアが反映されている。英語と漢字、カタカナを混在させた新文体「E漢力ナ混じり文」（エーカンカナマジンリブン）など、その独特の美意識やこだわりはやはり刺激的だ。

